

自讃歌の歌人とその周辺

丸 山 正 道

maruyama masamichi

「新古今集」の秀歌選である「自讃歌」から歌を取り上げて、種々論述していきたいと思う。

取り上げる歌人は、俊成、定家、西行、慈円の四人である。又、その周辺の歌人としては、尊円と建礼門院右京大夫とを、「自讃歌」とはちがう、別の資料から取り上げて、考えてみた。

まず俊成の歌から見ていくこととする。

● むかしおもふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山ほとゝぎす（資料1の（1））

この歌は、「治承右大臣兼実家百首」における「郭公」の題の歌である。

歌の意とするところは、草庵生活をしていて、夜、雨の音を聞きながらしみじみと昔のことを思いだし、懐旧の情で涙にくれている。折しも山ほとゝぎすの悲しげな鳴き声が耳に入ってきた。山ほとゝぎすよ、一層涙をそえてくれるなよ、の意。

この歌は、1178年（治承2年）俊成65歳の時の作品である。その二年前、1176年（安元2年）俊成63歳の時、俊成は重病にかかり、やむなく出家してしまう。それは、九月二十八日のことである。法名釈阿という。その翌年1177年（治承元年）藤原清輔が没する。年74歳。六月二十二日のことである。

この清輔は、歌の流れとしては、六条藤家の人で、しかも、時の摂政関白の藤原兼実家の歌の指南役をつとめていた。

俊成は、歌の流れとしては、御子左家である。

兼実は、清輔没後、歌の指南役を誰にするのか、考えあぐんでいた。そして年を越すこととなる。翌1178年（治承2年）六月二十三日、俊成は兼実家に初めて参内する。こうして俊成は、兼実家の歌の指南役になっていくのである。

このような背景のもとに作られたのが、「むかしおもふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山ほとゝぎす」の歌である。

● 源氏見ざる歌よミは遺恨の事也。（資料2）

「六百番歌合」冬上、十三番、「枯野」の題にみられる判詞のことばである。「六百番歌合」は、藤原良経の邸宅で行われた歌合で、判者は俊成。従って、この判詞のこのことばゝ、俊成のことば、ということになる。

「源氏」というのは源氏物語のことを指している。意味するところは、源氏物語を見ない歌よミ、源氏物語に精通していない歌よミ、歌人は、大変残念なことである、ということだと思う。

これは歌合せ、歌会にのぞむにあたっての基本的な、しかも根本的な作者の姿勢を語っていることばだと思う。

次に定家の歌を見ていくこととする。

● 玉ゆらの露もなミたもとゝまらずなき人こふるやとの秋風（資料3の（1））

この「自讃歌」という作品は、歌だけをのせていて、詞書はついていない。「新古今和歌集」では、このところを、「母身まかりける秋、野分しける日、もと住み侍りける所にまかりて」（788番、巻第八、哀傷歌）の詞書がみられる。

定家の母親が亡くなったのは、建久四年（1193年）二月十三日のことである。母が亡くなった年の秋、「野分しける日」、秋の台風があった日、定家はもと住んでいたところ、そこには父俊成が住んでいる訳であるが、そこへ定家は出かけて行って詠んだ歌が、この歌である。

定家32歳、俊成80歳。従って定家は俊成、数え年で49歳の時の子供ということになる。

歌の意とするところは、ほんのしばらくの間でさえ、露の玉も涙の玉も少しもとゞまることなく、乱れこぼれる。わたしが亡き母親を恋しく慕うこの宿に、秋風が吹きつけて、露をちらし、涙はとめどもなくあふれて、だと思ふ。亡き母親を偲び、父親の体を気づかい、折しも「野分しける日」に父親を尋ねていった折りの歌。その定家の母親を思う心情がよくでている歌だと思ふ。

「明月記」は、定家自身が書きあらわした漢文体の日記である。

治承四年（1180年）定家十九歳の時のことである。現存の日記は、この年からはじまっている。

● 世上乱逆追討雖満耳不注之紅旗征伐非吾事（資料4）

世の中の内乱、追討は毎日耳に入ってきている。しかし、私はこの事をいちいち注意して書き記していくことはしない。戦いは私の関心事ではないのだから。私の関心事は他にある。それは文学であり、芸術に関する事なのである。

これは、定家の世の中に対する姿勢、文学に対する態度を表明した一文であると思う。この一念、この信念で、定家は和歌の詠作に邁進していった、といっても過言ではないと思われる。

西行の歌を見ていくこととする。

● としたけて又こゆべしとおもひきや命なりけり小夜の中山（資料5の（2））

西行晩年に詠んだ歌の一首である。「西行上人集」雑には、詞書が、「あづまのかたへ、あひしりたる人のもとへまかりけるに、さやの中山見しことの昔に成りたりける、思ひ出でられて」とある。

三十代の時に一度、そしてこの度文治二年（1186）六十九歳の時、再びここ小夜の中山を通っていくのである。その感慨を述べたもの。歌の意とするところは、年をとって、再びここ小夜の中山の地を越えていこうとはその当時思ったであろうか。いや思いはしなかったであろう。それなのにこうして越えるとは、命あってのことだなあ、の意。作者は、命の貴さをしみじみと実感しながら、ここ小夜の中山を眺め、そしてここを通過したのである。

小夜の中山は、遠江国、今の掛川市の金谷町にある。余談であるが、筆者は学生時代、ここを訪れたことがあるが、その当時は、木がたくさんおい茂り、昼でもなお暗い、という印象を受けた。ここ小夜の中山を通過して、更に行くと、神奈川県鎌倉にたどり着く。

文治二年（1186年）陰暦八月十五日、西行は鎌倉を徘徊しているところを、頼朝と出会う。そして一晩語り明かすのである。

この時、頼朝は、西行に二つのことを質問する。一つは「兵法」の事である。もう一つは「歌道」の事。「弓馬の事」・「兵法」については、たしかに私は武士の出であるが、しかし、随分昔に出家遁世してしまい、従って、その件については「皆忘却し了んぬ」といっているのである。

もう一つの「歌道」については、がこの文言である。

詠歌は花月に対して動感するの折節は、僅に三十一字を作る許なり、全く奥旨を知らず（資料6）と。歌の秘伝について、頼朝の質問に対して西行が答えたのが、つまり、「詠歌は花月に対して動感するの折節は、僅に三十一字を作る許なり、全く奥旨を知らず」であった。意味するところは、私が和歌

を詠歌するとはどういうことかという、と、「花」は春、「月」は秋、つまり春夏秋冬、季節のその折々、物にふれて感動する、その感動を僅に「三十一字」にそれを作っていくだけのことである。従って、おおせの「奥旨」和歌の秘伝については、何も持ち合わせていない、と。従って、そのあとの文言の「是彼」の「是」は、和歌の「奥旨」のこと、「彼」は、「兵法」のこと、これらについては、回答しようにも何も持ち合わせていない、と。こう答えたのである。頼朝からしばらく鎌倉の地に「抑留」するように言われたのであるが、私は先を急いでいますので、ここでおいとまさせていただきます、と西行は語って、翌十六日に鎌倉をあとにするのである。そこで頼朝は記念に、といって、「銀作の猫」を西行に贈ったのであるが、その今受け取ったばかりのその「銀製の猫」を「門外」で遊んでいた子供に、何のおしげもなく与えてしまうのである。

西行がめざすところは、奥州の平泉であった。この旅は、東大寺大仏殿再興の砂金勧進の為、平泉に向っていたのである。

資料 7によると、久保田淳氏は、西行と慈円との関係を、慈円は「西行の精神的息子」である、と説いている。この指摘は、とても重要だと筆者は考えている。

俊成と定家とは血のつながった親子。

西行と慈円とは、精神的な密度が極めて高い「親子」

この二組の親子は、新古今時代の和歌の世界を考えていく場合、大きな柱となっていると思う。

慈円の歌で資料8の(1)の歌に関して。

作者慈円は、出家した当時は法名道快。27歳、この頃法名を慈円と改めている。「慈鎮」は、入滅後十三年嘉禎三年(1237年)、良快の奏上により四条天皇から「慈鎮和尚」の諡号(おくりな)を賜っている、その名前である。

● 岡のへの里のあるしをたつぬれ八人はこたへず山おろしのかせ (資料8の(1))

歌の意とするところは、岡のほとりの閑居の主を尋ねると、なかからその主人の応答はなかった。ただ山おろしの風が聞こえてくるだけで……。

この歌は、七巻本拾玉集、巻第二、「楚忽第一膽百首」の「山家」の題の詠。文治四年(1188年)十二月の詠。作者34歳。

この歌は、更に建久九年(1198年)頃に成立したか、と言われている「慈鎮和尚自歌合」八王子、十二番、にも見られる歌である。それは、

左

● 人はなし嶺に松風まどに月しめえてすめる山の奥かな

右勝

● 岡のへの里のあるしを尋ねれば人はこたえず山おろしの風

で、「岡のへの」の右の歌を「勝」としている。判者は俊成。

その判詞は次の通りである。

「左の、嶺の松風、窓の月、山のおくのすみか、たのもしくは侍るを、右の岡のべは、さまでふかゝらず侍れど、人はこたへざらん山おろしの身にしてみて、すこしはまさるべくや」

判詞というのは、その判者の歌論にもつながっていくものである。

左の歌は、詠んでたちどころに、山の奥で草庵生活を送っているこの歌の作者の俗世間を離れて、いかにも隠遁者としての風情が、「嶺に松風」、「まどに月」、「しめえてすめる山の奥かな」と表現していて、それが端的に出ている。それに対して、右の歌は、岡のへの草庵生活者を探ねていった時の状

況を語っているもので、下句の「人はこたへず山おろしの風」に「身にしみて」、云ふに云われぬものを感じ、あるいは表現を通して言外の言を感じ、或いは余情の重さ、ともいうべきものを感じる、として右の歌を、判者俊成は「勝」としているのである。

この辺の歌の評価の仕方を、我々は学ぶべきだと思う。

なお「自歌合」というのは、左右の歌を自分の歌で番わせて作ったもので、判者は、その当時著名な人に依頼するのが普通である。

「玉葉」は、慈円の兄、九条兼実の漢文体日記である。治承三年陰暦四月、

二日、寅庚〔天〕晴、午刻、法性寺座主道快被来、千日入堂了、去二十四日下京、今日始被来也、條々有被示合事等、大略世間事無益、有隠居之思由也、余加制止了（資料9）

「千日入堂」とは、千日間山に籠って修行に励むことを指している。

治承三年（1179年）二月に「千日入堂」修行了んぬ、とした場合、逆算的に考えると、修行開始の時期は安元二年（1176年）六月頃からか、となると思う。治承三年は作者25歳、安元二年は作者22歳、ということになる。

ここで慈円は、兼実に二つのことを語っている。一つは

「大略世間事無益」と云っている。慈円は千日修行に励んだが、概して、「世間事」、つまり比叡山のこと、「いいことがない」、と云っている。「無益」とは「いいことがない」という意味である。争乱に明け暮れている比叡山に我が身を置くことは、価値がない、と云っているのだと思う。

もう一つは、「有隠居之思由也」と云っているのである。「隠居」、つまり私（慈円）は草庵生活、隠遁生活を始めようと思う、その希望だ、と云っている。しかし、この件については、兄兼実は、「加制止了」と云って、兼実は、反対の意をとらえた、と云っている。

比叡の山に堂衆学徒不和の事出で来りて学徒みな散りける時、法印慈円千日の山籠り満ちなむことも近く、聖の跡を絶たむ事を嘆きて、かすかに山洞に留まりて侍けるほどに、冬にもなりければ雪降りたりける朝、尊円法師のもとにつかはしける

法印慈円

● いとゞしくむかしの跡や絶えなむと思ふもかなし今朝の白雪

返し

尊円法師

● 君が名ぞ猶あらはれん降る雪にむかしの跡は埋もれぬとも（資料10）

この贈答歌は、「千載和歌集」巻第十九「釈教歌」にでてくる歌である。詞書の堂衆というのは、寺院諸堂に分属して、雑役に従事した法師を指す。本来は、学徒・学生・学侶の下使いの童部である。「学徒」・「学生」・「学侶」は、山に籠って、止観・真言の二つの業を修める僧侶を指す。この争いは断絶的に続くのであるが、この詞書のところは、治承二年（1178年）十月のことである。この時、慈円は、24歳であった。

歌の意とするところは、慈円の歌は、いよいよますますもって昔の天台の聖人の跡が絶えてしまうであろうかと思うと、とても悲しいことだ。今朝人の跡を消して降り積る白雪を見るにつけても。

返しの尊円の歌の意とするところは、天台学統を護るあなたの名前は、やはり顕われることでしょう。降る雪によって昔の伝統が仮りに埋れたとしても。

かえりみると、慈円の歌は、このまゝ争いが続くと、伝教大師以来の聖の残した天台学統が絶えてしまうのではないかと、とても心を痛めている。悲痛な気持ちで、それを訴えている内容の歌だと思う。それに対して尊円法師の歌は、千日間入堂の修行を積んで天台学統を護っていこうとする慈円の姿勢を高く評価し、激励し、期待をこめている様子がうかがわれる歌の内容となっているものである。

ちなみに尊円という人は、

俊成

|| 一尊円

夕霧

|| 一建礼門院右京大夫

伊行

という人である。

建礼門院右京大夫と尊円とは、母を同じくする兄妹である。尊円が兄、建礼門院右京大夫が妹である。「ひこほしの」の歌は「建礼門院右京大夫集」からとりあげたものである。この「建礼門院右京大夫集」から一首とりあげるとしたら、どれにするか、という問いがあった場合には、私は、この歌をあげたいと考えている。

この歌は、五十一首から成る七夕歌群の一首である。

● ひこほしのゆきあひのそらをなかめてもまつこともなきわれそかなしき (資料11の(1))

歌の意とするところは、牽牛星が織女星と出会う、七夕の空を眺めるにつけても、もはや恋人は亡くなってしまい、恋人の訪れを待つこともない私は、悲しいことである、の意だと思う。七月七日、七夕、今年は八月十一日がその日にあたる。建礼門院右京大夫の恋人は、平家の公達平資盛である。

自讃歌資料

1、 皇太后宮大夫俊成

- (1) むかしおもふ草の庵の夜の雨に
涙なそへそ山ほととぎす
- (2) 稀にくる夜半も悲しき松風を
たえすや苔の下に聞らん
(細川文庫本「自讃歌」)

2、 源氏見さる歌よミは
遺恨の事也 (俊成)
(六百番歌合、花溪本)

3、 定家朝臣

- (1) 玉ゆらの露もミたもととまらず
なき人こふるやとの秋風
- (2) 駒とめて袖うちはらふかけもなし
佐野の渡のゆきの夕暮
- (3) 年もへぬいのる契りハ初瀬山
尾上の鐘のよその夕暮
(細川文庫本「自讃歌」)

4、 九月
世上乱逆追討雖満耳不注之、紅旗征戎非吾事
(定家)
(明月記、治承四年、国書刊行会本)

- 5、
- (1) よしの山やかていてしと思ふ身を
花ちりなはと人や待らん
- (2) としたけて又こゆへしとおもひきや
命なりけり小夜の中山
- (3) 風になひく富士の煙の空に消て
行衛もしらぬわかおもひ哉

(細川文庫本「自讃歌」)

6、

詠歌は、花月に対して動感するの折節は、僅に三十一字を作る許なり、全く奥旨を知らず、然れば是彼報じ申さんと欲するも所無しと云々 (西行)

(吾妻鏡、文治二、八、十五の条、龍肅訳注、岩波書店本)

7、

西行の自問「いかにかすべきわが心」(『聞書集』に、「地獄絵を見て、見るも憂しいにかにかすべきわが心かかる報いの罪やありける」という問いを自らの問いとして、生涯誠実に苦しんだ人は、西行の精神的息子ともいうべき慈円であったろう。

(久保田淳氏説)

(久保田淳著「山家集」岩波書店1983年6月)

8、

天台座主慈鎮

(1) 岡のへの里のあるしをたつぬれは
人はこたへす山おろしのかせ

(2) おもふことなととふ人のなかるらん
あふけはそらに月そさやけき
(細川文庫本「自讃歌」)

9、

治承3、4、2の条

天晴、午刻、法性寺座主道快被来、千日入堂了、去二十四日下京、今日始被来也、条条有被示合事等、大略世間事無益、有隠居之思由也、余加制止了、

(玉葉、治承3、4、2の条、国書刊行会本)

注、法性寺座主道快一慈円のこと。

余一兼実のこと。

10、

比叡の山に堂衆学徒不和の事出で来りて学徒みな散りける時、法印慈円千日の山籠り満ちなむことも近く、聖の跡を絶たむ事を嘆きて、かすかに山洞に留まりて侍けるほどに、冬にもなりにければ雪降りたりける朝、尊円法師のもとにつかはしける

法印慈円

1 2 2 5 いとどしくむかしの跡や絶えなむと
思ふもかなし今朝の白雪

返し

尊円法師

1 2 2 6 君が名ぞ猶あらはれん降る雪に
むかしの跡は埋もれぬとも

(「千載和歌集」、新日本古典文学大系、岩波書店)

11、

- (1) ひこほしのゆきあひのそらをなかめても
まつこともなきわれそかなしき
- (2) 月をこそなかめなれしかほしの夜の
ふかきあはれをこよひしりぬる
(建礼門院右京大夫)
(細川家本、「建礼門院右京大夫集」)

(備考) この論文は、平成17年7月9日(土)、弘前学院大学国語国文学会における研究発表に基づくものである。